通学路の安全と装備調達のために造成した国後島・植内の赤岩防波堤跡（国後島）

道路整備はされず、戦前同様
いまも砂地のまま
（2011年9月撮影）

赤岩に残るコンクリート製の防波堤跡
（2011年9月撮影）

浸食を受けていずれは
砂に埋もれてしまうのだろう
（2017年8月撮影）

赤岩の岬は柱状節理の美しい
場所としても知られた
（2017年8月撮影）

国後島留夜別村で十二年間、教育に携わった田村久之助さん（故人）が「千島教育回想録」（一九七七年発行）で、赤岩にまつわるエピソードを紹介している。

一九三五年（昭和十年）に植沖小学校の校長として赴任した時のこと。当時、植沖地区では小学校を卒業した子供たちは強制的に青年学校に入り、そこで軍事教練が行われた。年に一度、陸軍大佐が来村し、厳しい査察が行われた。

ちょうどひどい不況下で、余裕のない村では教練に使う背嚢（リュックみたいなもの）、帯革（バンド）、銃剣などの装備を新調できず、手作りのみすぼらしいものしかなかった。

子供たちに肩身の狭い思いをさせたくないと、地区中心校だった植内小学校の村田吾一校長（羅臼村公選初代村長、故人）が音頭をとり、植内、植沖、代々別の三小学校区の青年団が協力して、公共工事を請け負い、その代金で装備を整えることになった。

その公共工事が、赤岩防波堤工事。オキツウスから植内に向かう途中にある、通称赤岩。海に突き出た小さな岬だが、潮が込んできたり、波が高くなると道路が冠水、通学する子供たちにとって危険な場所だった。

三地区から毎日百人の青年団員が連日作業を行い、一ヵ月以上かかって完成させた。

八十年以上経過した現在、赤岩には防波堤基部のコンクリートがところどころに残っている。